

『脱走計画』

トゥーニャ・ルムナは足りない能力全てを、魔力で補って生きている。歩く時には、追い風を吹かせ、段差を越える時にはふわりと浮かんで越える。そんな彼女が、魔力を行使できない場所に閉じ込められたのなら――。

「苦しいよお……っ」

狭い部屋の中であっても、移動さえ大変であった。

(なんで捕まったんだろう？ 考えてみよう……)

ベッドの上に到着して、目を閉じて考えてみる。

本当にただ、トゥーニャはいつもの通りお散歩をしていただけだった。

そしたら、煙が見えたのだ。

何だろうと思って、近づいた。そこに騎士団員がいて……。

ドン、ドン、ドン！

「よお、新入り、聞こえるか」

壁を叩く音が聞こえた。

「ん？ ここに捕まってる人？ なあに」

トゥーニャは壁に近づいて、耳を当てた。

「アンタも大したことしてねえのに捕まったんだろ？」

男性の声だった。

「ぼくは何もしてないんだよ」

「そうか、そりゃ災難だったな。かわいそうに」

男性は騎士団員とは違い、トゥーニャの言葉を信じてくれた。

「来月、ここの大掃除が行われるはずだ。部屋の掃除のとき、俺らは広間に集められる。何人が監視の騎士団員がつくと思うが、隙を見て突破しようぜ」

以前そうして集められた時、同じ境遇の囚人と軽く打ち合わせをしてあるとのことだった。

「でもそうやって無理に出ても、また捕まっちゃうよ？」

「ここから出れさえすれば、捕まえることなんてできやしない。俺らには魔力という力がある。どっかに村を作って、俺らは俺ら達だけで暮らす」

「ん……悪い事してないのに、捕まるのって変だよな」

ここにいる人たちの多くが自分と同じなのかなあとトゥーニャは思う。

何もしていないと言っても、騎士団の人は信じてくれないのだ。

「俺らの自由を奪う権利なんて、誰にもありはしない」

隣室の男性は怒りに震えているようだった。

「体力をつけておけ。魔法の使い方を忘れないよう、イメージトレーニングも欠かさなよ」

そう言うと男は壁から離れていった。

ベッドに戻り、どうすればいいのかなあとトゥーニャは考える――。

こちらのリアクションは以下の方に発行されています。

トゥーニャ・ルムナ